

日本の被害者運動報告

全国クレジット・サラ金被害者連絡協議会
会長 山地秀樹

台湾の皆さん、こんにちは。

私は、山地秀樹と申します。

私は、現在、日本各地に89団体ある「クレジット・サラ金被害者の会」の全国組織である、「全国クレジット・サラ金被害者連絡協議会」の会長を務めています。

私は、元多重債務当事者です。会長になる前は、公の場で自分の借金の体験談を話すことなど、とてもできませんでした。「借金は恥。借りた方が悪い」とか、「返せなくなって、なぜ被害者なのか?」とか、「借金は自己責任」という風潮が社会に根強くあるからです。

そんな私を大きく変えたのは、私の前任の会長でした。「元多重債務者」という肩書きとともにモザイク無しの顔出しでテレビ出演し、自らの体験を語り、高金利被害を訴えたのです。これには本当に驚きました。そして、ただただ敬服するばかりでした。

このような当事者たちの自らの勇気ある言動が、金利引下げ運動の大きな原動力となり、やがてマスコミ等世論を動かし、ついに国をも動かしたのです。

後を引き継いだ私も、前任の会長を見習い、いろいろなところで自分の体験談を語ってきました。

日本で儲けられなくなったサラ金業者は、現在アジア各国にたくさん進出しています。日本最大手のアコムは、2004年、台湾で最大手銀行の「中國信託商業銀行」と業務提携を締結し、無担保ローンのノウハウを提供しているとのこと。

日本のサラ金のノウハウとは、かつて日本で「サラ金地獄」とまで言われた社会問題を巻き起こして自殺者や夜逃げ等を急増させた、「サラ金3悪」と呼ばれた「高金利・過剰融資・過酷な取立て」のノウハウです。

台湾でも、借金原因の練炭自殺が跡を絶たないと聞いています。

かつて私も多重債務者だったころ、末期には毎日自殺を考えるようになっていました。その頃私の家庭は地獄のようでした。家族の会話も全くなく、テレビのお笑い番組を見ても笑いひとつおきません。家庭は殺伐とし、家族は崩壊

寸前でした。

「自分はいったい誰のために働いているのだろうか」・・・。

「人生をリセットしたい」・・・。

仕事も全く手につかなくなり、外回りの営業へ出ても、川原などの人目の付かないところに営業車を止め、ボーっと空を眺め、「生命保険で仕舞いするしかない」・・・「ビルの屋上から飛び降りようか」・・・「車で壁に激突しようか」・・・生きることに希望が持てず、毎日毎日自殺を考えるようになっていました。

「万事休す」か・・・どん底まで気持ちが落ちたとき、財布の中にクレサラ被害者の会の「クレサラ110番」という借金問題相談の新聞記事の切抜きを入れていることを思い出しました。この記事は1年前に見たものでしたが、そのときはまだ「こんなところに相談しなくても、自分で解決できるはずだ」と自分に言い聞かせ、電話も何もしませんでした。しかし、新聞記事は捨てられず財布に入れていたのです。ただ、1年前の記事でしたので、その電話番号が現在も使われているかどうかはわかりません。藁をも掴む思いでした。

電話は繋がりました。

2000年9月、私はクレサラ被害者の会に辿り着き、「私の命」はこの世に繋ぎ留められました。そして15年間続いた借金人生に終止符を打つことができました。

高金利は人を破壊し社会をも破壊します。

サラ金、消費者金融、庶民金融などと呼ばれるところから生活費等を借りる人たちの多くは貧困層です。生活費に困ってお金を借りる人が、高金利の支払いを続けられるわけがありません。

多重債務者だった頃、私は「給料日」が嫌いでした。給料が出る度に、支払いのために、幾つものサラ金業者のATMを回らなければならなかったからです。支払いそのものも大変でしたが、それよりもサラ金業者のATMに行くことが嫌でした。私が借りていたサラ金のATMは、繁華街のサラ金ばかりが入居したビル（通称サラ金ビル）にあり、そのビルに出入りするところを見られるのがたまらなく嫌でした。通りすがりの知らない人に見られるのでさえ嫌でした。

会社の同僚は、給料が出ると「酒を飲みに行こう」と誘ってきましたが、私は憂鬱でたまりませんでした。

私が初めて被害者の会に相談に行った翌日、たまたま月1回の定例会とやらで、相談員の人から「明日の定例会に参加してみてください」と言われ、言われるまま参加しました。

仕事の都合で開始時間より遅れて参加したところ、そこには20名近くの人が集まっていました。みんな借金を抱えている人のようで、1人1人順番に、それぞれ借金のことなど自分の経験や思いを語っていました。

最後に私の番がきました。

私は、今まで誰にも話せなかった「給料日が嫌いだ」という気持ちを、思いのまま語りました。参加していたみんながうなずいてくれました。

「こんな気持ちや借金のことを話せて、皆が共感してくれる」・・・私が今まで生きてきた社会では、こんな場はありませんでした。

当時の私からすれば、得体の知れない「被害者の会」とやらに来て2日目でしたが、「今まで1人で悩んでいたけれど、ここなら、自分の気持ちが解ってもらえる人がある」と思い、入会してここで頑張ってみようと思決心しました。

入会后、被害者の会の「勉強会」に参加して、今まで知らなかったいろいろな法律を覚え、知識も増えました。そのたびに少しずつ強くなり、これから生きていく勇氣と力が身についていったと思います。

また、勉強会や定例会に参加して、仲間もできました。みんなでハイキングや懇親会などのレクリエーションに参加して親交も深められています。

借金のことなど、一般社会ではとても話せないことが、被害者の会では話せます。「会に来ると、ホッとする」という方もいます。借金で苦しんだ者同士、心が通じ合うことも多いのです。

被害者の会の役割は、生活立て直しはもちろんですが、心身的ケアもとても重要な役割になっています。

台湾からの問いである、①いかにして多重債務者の世間に対する負い目を変えたか、②いかにして多重債務者をして立ち上がらせたか、についての答えは、「クレサラ被害者の会」の長年の運動によるものに尽きると思います。

被害者の会に辿り着かなければ、今、私はこの世にいなかったかも知りません。命があったとしても、自分と家族の借金だけを解決して終わっていたはずで。こういった運動にはおそらく参加していなかったでしょう。被害者の会での活動が、私を大きく変えたのです。

エンパワーメント (Empowerment) という概念があります。人は皆生まれ持った豊かな個性や感性や能力などがあり、潜在的に持っているそれらを回りの支援によって生き生きと発揮させることができるというものです。クレサラ被害者の会の活動は、そういった面がおおいにあり、それが多重債務者ひとりひとりを立ち上がらせ、大きな運動へと発展できたのではないのでしょうか。

私はたまたま新聞記事を見て助かりました。ところが、そういう記事などを目にする事なく、借金によって失わなくてもよかった「命」を、自ら絶ってしまった方は現在でも跡を絶ちません。

一度死を決意した私の使命のひとつは、借金のため自ら命を落とされてしまった人たちの代弁者だと思っています。そして、死の淵に彷徨いかけている人を一人でも救い、借金で命を失うことのない社会を築きたいと思っています。

そして、自らの体験を語ることで、高金利被害の実態を世の中に知ってもらいたいと思います。